平成27年6月1日発行　第46巻 第6号　毎月1回1日発行　昭和46年1月27日第3種郵便物認可
ISSN 0385-2229

月刊

地域保健

6
2015

●特集

食の安全をめぐる話題

—次世代の健康を守るために、知っておきたいこと

●統括に聞く

中野宏子さん《倉敷市保健所 保健課参事》

●ピープル

中澤正夫さん《精神科医》

月刊
地域保健
The Japanese Journal of Community Health Care 【Vol.46.No.6】
2015
6月

CONTENTS

8 特集
食の安全をめぐる話題
～次世代の健康を守るために、知っておきたいこと～

10 食品添加物を正しく理解する
20 食品中の放射性物質の安全性
32 母から子に移行する環境ホルモンの危険性
44 重金属が引き起こす健康被害
56 食の安全と保健師の役割―森永ヒ素ミルク中毒事件から

1 統括に聞く 中野宏子さん（倉敷市保健所 保健課参事）
68 REPORT 日本看護協会 統括保健師人材育成プログラム後期集合研修
72 隔月連載 東日本大震災で求められている公衆衛生活動とは〈第8回〉
78 ニュース
113 ひよこ、ホップ、ステップ、ジャンプ！ 三笠　香さん（五ヶ瀬町役場 福祉課 保健衛生グループ）
118 ピープル 中澤正夫さん（精神科医）

連載
66 理解して生かす保健師用語《第3回》 「健康格差」
80 ESSAY 国際保健《第3回》 松田正己
82 保健師のための閑話ケア《第54回》 藤本裕明
86 中臣さんの　環境衛生ウオッチング《第39回》 中臣昌広
91 いまどき子育てアドバイス《第213回》 中川信子

情報BOX 96……BOOK、月間レーダー、information、月間レーダー special edition!?

統括に聞く

岡山県
倉敷市

統括は一人では頑張れない。支えられて共に歩む

人材育成、保健師のアピール、情報共有…統括の基礎を築いてバトンタッチ

中野宏子さん ●倉敷市保健所 保健課参事

※写真は倉敷市美観地区にて

 文：白井美樹（ライター） 写真：カミヤス セイ

特集

食の安全をめぐる話題

次世代の健康を守るために、知っておきたいこと

経済の成長とともに化学物質の種類は年々増加しており、現在流通している数は数万種類と言われている。化学物質は、私たちの生活を便利にしてくれる一方で、有害性を併せ持つことから、誤った使い方をすると、人体や環境に多大な悪影響を与えてしまう。中でも特に懸念されるのが、口から直接摂取する「食べ物」に含まれる化学物質、汚染物質である。今回は、「食品添加物」「環境ホルモン」「重金属」、そして今なお不安の声が多い「放射性物質」のリスクと安全性について、各専門家に解説していただいた。また、かつて世間を震撼させた「森永ヒ素ミルク中毒事件」の全貌も紹介する。もはや私たちは食品リスクを避けて通ることはできない。食の安全を確保するには、今と未来の人々の健康を守るためには何が必要なのだろうか。特集を通じてあらためて考えてみたい。

P10 食品添加物を正しく理解する
◎取材協力：堀江正一さん（大妻女子大学）

P20 食品中の放射性物質の安全性
◎取材協力：蜂須賀暁子さん（国立医薬品食品衛生研究所）

P32 母から子に移行する環境ホルモンの危険性
◎取材協力：森千里さん（千葉大学予防医学センター）

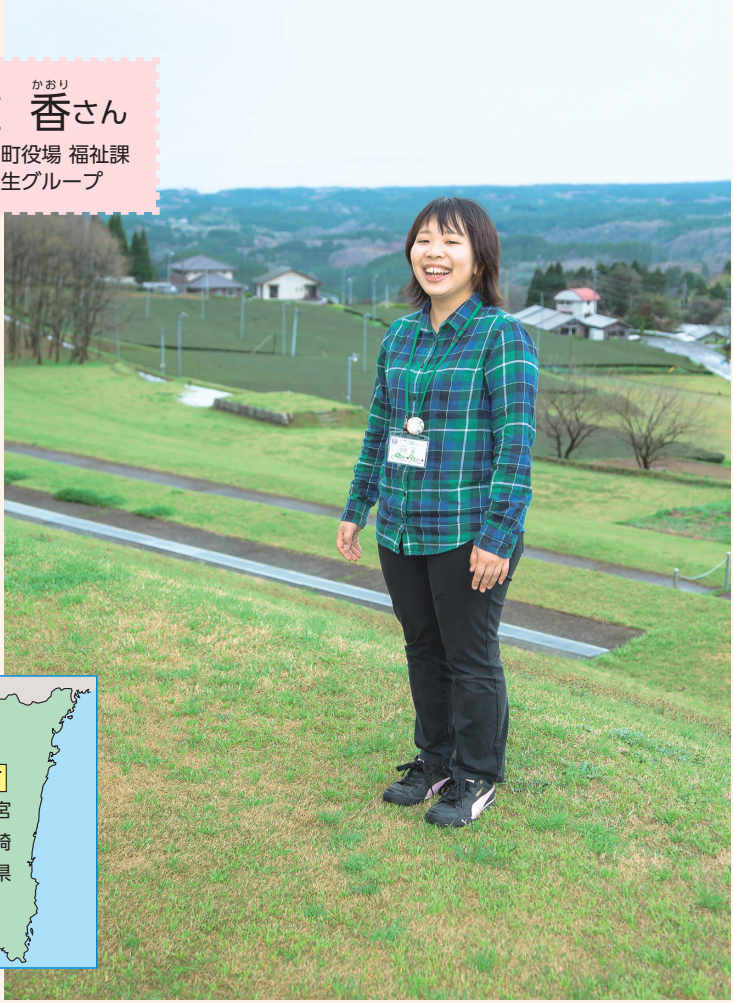
P44 重金属が引き起こす健康被害
◎取材協力：渡邉泉さん（東京農工大学）

P56 食の安全と保健師の役割―森永ヒ素ミルク中毒事件から
◎青山英康（岡山大学名誉教授）

さまざまな人生を共有できるのが保健師の醍醐味

個人から地域までを見て、住民に寄り添える保健師に

三笠（みかさ） 香（かおり）さん
●五ヶ瀬町役場 福祉課
保健衛生グループ



▲阿蘇の外輪山を望む高台にて

文：白井美樹（ライター） 写真：C.Kent

五ヶ瀬町は、宮崎県北西部にある山間部の町。豊かな自然に抱かれ、季節の変化が大きく、南国宮崎にありながら日本最南端のスキー場があることでも有名だ。

この町を訪れるなら、熊本空港から車で阿蘇山の裾野に沿って、幾つもの山ひだを越えていくのが一番近い。取材の日はあいにく豪雨と霧で、美しいはずのその景観を見ることはできなかったが、五ヶ瀬町役場に着き、三笠香さんの明るい笑顔に出迎えられた瞬間、奇跡のように雨が降りやんだ。

人が大好き

三笠さんが生まれたのは、高鍋町という宮崎県の中央部に位置する町だ。3人きょうだいの末っ子で、子どものころからとても人懐こく、見知らぬ人にも付いていってしまうほどだったという。

小学2年から中学3年までは、柔道をやっていたそうだ。

「始めたきっかけは、テレビで田村亮子さんの試合を見たことです。私はもともと小柄だったのですが、小さな田村選手が、大きい選手をバタバタと倒す姿を見て、自分もやってみたいと思ったのです。ただし、私の場合は、すごく弱くて、試合で負けてはよく泣いていましたが（笑）」

それでもやめないで、長年柔道を続けていたのは、三笠さんがガッツの持ち主であることの表れだろう。

ところが、高校と大学では、柔道とは打って変わって、茶道部に所属していたという。本人いわく、「おしとやかになりたい」と思ったのだそうだ。長年の付き合いの友達には、「結局、畳からは離れられないのね」と言われ、「そういえばそうだな」と気付いたとのこと。

そんな三笠さんが、宮崎県立看護大学に入学したのは、看護師の資格を取って、いずれは言語療法士になろう

▲五ヶ瀬町の名所となっているワイナリーにて

PEOPLE ピープル

公衆衛生活動は、地域を歩くことから始まる

統計からは、家庭の問題は見えてこない

精神科医
中澤正夫さん

●聞き手　編集部

写真：カミヤス　セイ

1963（昭和38）年から地域精神医療、開放病棟治療に取り組んできた中澤正夫さんは、保健婦との活動を通して公衆衛生の面白さを知ったという。しかし今日、保健師の在り方が当時と大きく変わり、「保健師はものすごく損をしていて、仕事の面白みをなくしている」と語る。中澤さんは保健婦とどのように連携し、何を教わったのか――。

当時を振り返るとともに、今後、医療や保健が向かうべき方向、中澤さん自身の展望について伺った。

貧しい農村で見た医療以前の問題

―まず初めに、先生が精神科医になった理由について教えてください。

中澤　僕が学生の頃は60年安保闘争があって、自前の民主主義が育っていった時代でした。そうした革新的な国民運動の影響を受け、医療や医学に対する考え方が僕の中で大きく変わりました。臨床医は、貧しい人であっても、誰もがその時代の一番良い医療を受けられるような体制をつくらなくてはならないと思いました。

そういった時期に精神科の授業が始まりました。その当時、江熊要一先生が中心となり、精神科病棟から格子も鍵も保護室も全部なくして、完全開放病棟にする運動を行っていて、僕たちはそうした病棟で実習を行い、医師や看護婦たちが奮闘している様子を目の当たりにしました。精神病患者は格子の中で治療するのが当たり前だと思っていた僕にとって、天地がひっくり返るような衝撃的なことでした。この動きの中に加わりたいと思ったのが、精神科医の道を歩むことになったきっかけです。

―長年、保健師と手を組んで取り組まれていますが、それはどういった経緯からでしょうか？

PROFILE ●なかざわ・まさお●

1937年群馬県生まれ。佐久総合病院、群馬大学医学部精神科などを経て、1979年より代々木病院に勤務。長年、長野県、群馬県の山村を研究フィールドに地域ぐるみの診療を実践し、代々木病院では被爆者の診療を行っている。東日本大震災後は被災地支援も精力的に行い、「特定非営利活動法人ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」の副代表理事を務める。『からっ風村の健康戦争』（情報センター出版局）、『修羅 果てしなく』（萌文社）、『死のメンタルヘルス』（岩波書店）、『早わかり精神医療10講義』（萌文社）など、著書多数。